

悪役令嬢改め、借金1億の守銭奴令嬢です

あんり
杏里

通称：つけまつげ。
金田の彼女。
メイクの才能がある。

かねだ ゆうと
金田悠斗

ちょっと軽い
不良男子だが、
実は人懐こく
面倒見が良い。
怖い姉がいる。

みずはら たくみ
水原拓海

とても厳しい
風紀委員長。
実はオタクで、
コスプレの趣味あり。

登場人物
紹介

じいや

常に百合子に付き従う
ダンディーな老執事。

ひびの はやと
日比野颯人

フンス
氷の王子と呼ばれる、
ひふみ学園人気ナンバーワン男子。
クールなイケメンだが、
ちょっと変わり者なところも。

きむ らん
木村蓮

ひふみ学園の保健医。
ヒロインのサポートキャラだが、
何か思惑があるようで……？

ひたし ろう
火谷翔

百合子のクラスメイト。
月影とはよくつるんでいる。

つき かけ たい き
月影大輝

ヒロインの幼なじみ。
ヒロインに夢中だが、
いまいち報われない。

ヒロイン

乙女ゲームのヒロイン。
裏表が激しい
ぶりっ子なものの、
おっちょこちよいで憎めない。

つち うら い づ き
土浦樹

放送部部长で、
美声の持ち主。
百合子のことを気にかけて、
何かと手助けをしてくれる。

しらぎ ゆり こ
白鷺百合子

乙女ゲームの悪役令嬢。
家の借金一億円に頭を悩ませ、
金策に奔走している。
大人っぽい、
結構天然な一面も。

第一章 令嬢、パパの破産を食い止める

女性向け学園恋愛シミュレーションゲーム、『ハートはノンストップ☆ハプニング』——略して『ハー☆ハプ』のヒロインは、父親の仕事の関係で海外に住んでいて、五年ぶりに日本に帰国した女の子。

彼女は語学堪能な特待生として、お金持ちの子息・令嬢が通う『私立ひふみ学園』に転入する。その学園生活の中で、ヒロインは素敵な男の子たちと恋の駆け引きを繰り返す。転校一日目、車に轢かれそうになったヒロインが、間一髪のところまで【氷の王子・日比野颯人】に助けられて物語が始まるわ。

物語に登場するキャラクターたちを紹介しましょう。

まずは、あなたのハートを燃え上がらせる、通常攻略キャラ。

幼なじみの月影大輝。

月影君の友達の火谷翔。

風紀委員の水原拓海。

実は、私にも事情がある。父親の事業の倒産や株損失で負債を抱えた白鷺家は、世界的大企業を経営する日比野家の財産をアテにしていた。

物語のラスト、私は借金のカタに、黒い噂の絶えない悪徳政治家ハラゴロマタロウ氏の、秘書という名の愛人にさせられる。しかも、ヒロインがどのキャラクターと恋を成就させようと、私は常に同じ結末を迎えてしまう。

だけど、物語はそれで終わりではない。

この物語はやり直しが可能で、ヒロインは七人の男子の中で一番攻略が難しい日比野君の恋人になろうと、何度も挑んでいる。けれど、彼女は最後に彼を攻略できていない。

そして私は、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、定められた不幸な運命を味わわれるのだ。

「物語を数十回も繰り返しているのに、ヒロインはまだ完全攻略できないの？ 私は今回も、また不幸な目に遭うの？」

物語のやり直し、世界のループ……繰り返される結末に気付いた私は、頭がおかしくなりそうだった。いや、おかしくなっていたかもしれない。

でも、数十回と悲劇の運命を経験するうちに、私の脆弱な魂は鍛え抜かれ、タフな女戦士に生まれ変わった。

「ヒロインが完全攻略を諦めれば、物語のループは終わる。でも欲深いヒロインは、攻略対象男子を全員モノにするまで決して諦めない。それなら私は、先にゲームを降りてあげる。これ以上ヒロ

インのお遊びには付き合えないわ」

悪役令嬢・白鷺百合子は運命に立ち向かい、自分の物語を攻略してみせる。

私はゆっくりとベッドから体を起こし、枕元に置かれていた手鏡を覗く。

二日間高熱にうなされたせいかわ、顔は青白く、目の下にクマが浮き出ている。長い黒髪は、寝汗でべったりと首に貼り付いていた。

私が熱を出して倒れた原因は、風邪だけではない。現在の我が家の窮状に悩んだせいでもある。

白鷺家は、私のお爺様がバブル時代に財を成した一族。優秀な長男である伯父様は海外で事業展開をしていて、次男のパパは地元で土地の管理と運用を任されていた。ママは財閥一族の娘、といっても八人兄弟の末っ子。

飛び抜けてお金持ちではないけど、そこそこ裕福な我が家に暗雲が立ちこめたのは二年前のこと。パパが、信頼していた友人に騙され、経営するゴルフ場が倒産したのだ。そこからパパは株投資に手を染めて大損を繰り返し、黒い噂の絶えない悪徳政治家に多額の借金をした。

二日前、パパが泣きながら私に見せた一億円の借借書。そこには十二月二十五日のクリスマスまでに借金を返済できない場合、娘を差し出すと書かれていた。

私の不幸の原因の半分はヒロインの存在で、残り半分はパパの借金なのだ。

私はよるめきつつ部屋を出て、廊下の壁伝いに歩く。

その途中、半分開いた扉の向こう側に、三台のパソコンモニターを前にしてうめき声をあげるパ

パの姿が見えた。それを無視して応接室に向かうと、不安そうな表情のママが私に気付き、驚いてこちらを見る。

「百合ちゃん、無理をしてはダメよ。お医者様は絶対安静とおっしゃっていたわ」

「ママ、百合子は決意しました！ 愛や恋なんて不確かなモノに縛るのはやめて、パパの借金一億円は、私の力で完済します」

ヒロイン転入一日目の、五月のゴールデンウィーク明け。

朝、自宅の鏡の前で自分の姿を確認したヒロインは、とっても満足していたの。

『今回はとびつきり可愛いヒロインに仕上げたわ。この姿でヘルモードの最難関攻略キャラ・日比野颯人君の好感度をMAXにして、今度こそ最高のエンディングを迎えるの♪』

ヒロインは、物語をやり直すたびに毎回キャラクターを作り替えて、違う名前や姿で攻略対象男子との恋愛を楽しむことができるんだから。

お金持ちの子息・令嬢が通う小中高一貫校、私立ひふみ学園。そこに特待生として通うことになったヒロインは、幼なじみの月影大輝君と並んで朝の通学路を歩く。

「今日からヒロインちゃんと同じ学校に通えるなんて、夢みたいだ」

月影君はサッカー部に所属している高校二年生で、ちよつとやんちゃで明るい性格。彼は初恋の女の子であるヒロインをずっと想い続けている。

「月影おはよう。彼女がお前の幼なじみのヒロインちゃんか」

背後から月影君の肩を力一杯叩いたのは、彼のお友達でサッカー部GKの火谷翔君。ガツンとした男らしい体格で、日に焼けた肌に白い歯が光る体育会系男子よ。

彼はヒロインが笑顔で挨拶をしたら、驚いたように目を丸くした。物語だと、この瞬間、火谷君はヒロインに恋に落ちるの。

三人で並んで歩いていると、私立ひふみ学園の重厚で大きな校門が見えてきた。

校門前で生徒の服装チェックを行っているのは、三人目の攻略キャラ、風紀委員の水原拓海君。彼はヒロインを見て、すぐに服装の指摘をする。

「その女子、スカarfが裏返しじゃないか。だらしないぞ」

風紀委員の水原君は後ろになでつけた黒髪と、銀縁メガネの奥の鋭い眼差しが特徴的な、厳しそうな雰囲気の子。

そんな彼に、ヒロインは困った顔で『転校生だからスカarfの結び方が分かりません♪』と駆け寄ってスカarfを手渡したわ。この先の展開はこう。

可愛らしいヒロインの仕草に見惚れた水原君は、うっかりスカarfを手放してしまう。

ヒロインは風に乗って飛んでいくスカarfを追いかけて道路に飛び出す。すると、そこに黒塗りの高級車がやってくるの。

車に轢かれる寸前のヒロインの腕を引いて危機一髪の場面を救うのは、物語の最難関攻略キャラ・日比野颯人君。

そして黒塗りの高級車から降りてくるのは、悪役令嬢・白鷺百合子のはずんだけど……
ヒロインが道路の真ん中に突っ立ったまま待っているのに、いくら経っても黒塗りの高級車は現れない。

そんなヒロインの横を、大勢の女生徒に取り囲まれた氷の王子・日比野君が通りすぎていった。

結局、いつまでも来ない黒塗りの高級車を待つのは諦めたヒロインは、自分の教室に向かったの。
ひふみ学園高等部、二年B組の教室。

『みなさん初めまして、ヒロインです。どうかよろしくお願いします♪』

物珍しそうな視線を受けつつ自己紹介すると、クラスメイトから拍手で迎えられた。ヒロインは先生に指定された席に腰かける。

ヒロインの席から二つ前には、日比野君の姿があった。そして、斜め向こうの白鷺百合子の席は空席。えっ、悪役令嬢が転入一日目に欠席なんて初めてだよね……!?

転入一日目の午前が終わり、四時限目終了のベルが鳴った。

待ちに待ったお昼休み、ヒロインは月影君に学園を案内してもらいながら、学食に向かうの♪

それにしてもおかしいわ、ヒロインと氷の王子・日比野君が会えないイベントがなくなっているな

んて……

首を傾げて大勢の学生が行き交う廊下を歩く。すると、髪をオレンジに染めて両耳にピアスをした男子が、モブキャラ女子たちを引き連れてやってきた。

彼は、ヤンキー風イケメン男子、難関攻略キャラ・金田悠斗君。

月影君のように話しかけるだけで攻略できるチョコロ男と違って、金田君は攻略難易度が跳ね上がるの。本当だったら、ヒロインが食堂の前で金田君とぶつかり、そこに現れた悪役令嬢に罵られるイベントが発生するんだけど、肝心の悪役令嬢・白鷺百合子は学園を休んでいる。こうなったら自力でイベントを発生させるしかないわ。

『月影君お願いがあるの。ヒロインはトンカツ定食が食べたいから、急いで確保しておいて♪』
邪魔者の月影君を注文に走らせて、ヒロインは食堂入り口前で金田君を待ち構える。

ところが――

『今日の日替わりメニューはつまらないなあ。外でラーメンでも食べるか』

金田君は壁に貼られたメニューを見て大声で愚痴ると、ヒロインの手前で反対方向に去っていったしまったの。

『えっ、ヒロインとの出会いを無視してラーメン食べに行くって、どうしてそうなるの!』

難関攻略キャラという獲物を逃がしたヒロインは、廊下で仁王立ちになって叫ぶ。そんなヒロインの背後から、月影君が呑気に声をかけてきた。

「ヒロインちゃん、トンカツ定食は売り切れだよ。でも大丈夫、ゴーヤー定食を注文しておいた

今日は、ヒロインの転入一日目となる日。

物語通りに進むのならば、ひふみ学園校門前で白鷺家の車の前にヒロインが飛び出して、危うく轢きかけるといふイベントが起こる。

これがきっかけで氷の王子・日比野君とヒロインが出会う。それから事態はすべて私・白鷺百合子にとって悪い方に転がり、最後には必ず日比野君に悪事を糾弾されて、学園を追放される。

だから今回、物語を無視すると決めた私は、風邪を理由に学校を休んだ。私の不幸の原因の半分はヒロインの存在だから、できるだけ彼女には関わらないように心がけることにした。

そして残り半分の原因の解決——パパの借金返済に専念すると決意している。

風邪で寝込んでいた私を氣遣って、家政婦のばあやが朝食をお粥かかにしてくれた。

食堂の大きなテーブルに、私とママは向かい合って座っている。パパは自室に引きこもっているので、上座かみざは空席。ママが食後のコーヒを飲み終えたところで、私は意を決して声をかけた。

「あのねママ、私知っているの。ママがパパのパソコンにスパイウェアを忍び込ませて監視していること。それと家の電話に盗聴器を仕掛けて、パパの会話を全部盗み聞きしていることも」

「な、なにを言っているの百合ちゃん。ママはそんな盗聴なんて……」

私の言葉に、ママはとても狼狽うろたえて目を泳がせる。昔ちよつと浮気をしたことのあるパパを、嫉妬と深いママはずつと二十四時間体制で監視していた。

「ママはパパが心配で、こっそり見守っているのよね。私、パパのお仕事を手伝いたくて、学校の授業で株取引を教わったの。お願いママ、パパがパソコンでどんな風に資産運用をしているのか見せて下さい」

後ろめたい気持ちがあるママは、私の言葉に逆さからえない。

私はママのお部屋に呼ばれ、化粧台の鏡にカムフラージュした二十五インチモニターに、パパのパソコン画面が映し出されるのを見た。

現在、パパが取引している内容を確認する。どうやら悪徳政治家ハラグロマトロウ氏から借りた一億円を、全部株取引につき込んだみたい。

パパはダメ相場師として素晴らしい才能を發揮し、買い付けた八〇〇〇万円の株式を面白いくらい減らしていた。

「ねえ百合ちゃん、ママはあまり数字が得意じゃないけど、画面の数字が赤や青にピカピカ光って凄いわね。これだけ沢山の株を運用できるなんて、パパは素晴らしいわ」

「ママ、私にパパの株取引口座のパスワードを教えて！ この取引履歴を見ると、パパは借金してつぎ込んだお金を、ひと月で八〇〇〇万円も溶かしている。今すぐ取引をやめさせないと、私たち明日にも破産しちゃう！」

私の声はもはや悲鳴だった。娘の叫びに危機感を覚えたのか、ママの手の動きは速い。

ママは見事なブラインドタッチで五つのパスワードを打ち込み、パパが開いているパソコンを強制シャットダウンさせる。廊下の向こう側から、株トレード中だったパパの悲鳴が聞こえてきた。

「百合ちゃん、パパは株取引で儲けているんじゃないの？ 溶かしたってどういう意味？」

「ママ、このモニターに表示されていた赤い数字は全部マイナスよ。溶かしたっていうのは、資金をなくすこと。パパはこれまでの株損失を必死に取り戻そうとしていたけど、ことごとく外して大赤字になっているの」

パパの取引履歴を見ると、株価の値動きと真逆の取引でマイナスを増やし、株損失九割九分に達している。専門家のアドバイスも無駄。ここまでくると、負けの天才としか言えなかった。

「この証券会社には、実際のお金を使わずに株取引が体験できるバーチャルトレードがあるから、それでパパに株取引をさせて。これからはお金を一円もつぎ込ませちゃダメ」

私はママに説明しながら、別のノートPCでパパの株取引口座にログインし、残金をすべてママ名義のネットバンクへ移動させる。

「ママは株のことは分からないけど、パパを、ママが作った偽装サイトからバーチャルトレードサイトへ誘導して、そこで遊んでもらえばいいのね。ママが画像加工しても、パパは本物と信じて疑わないから大丈夫」

「えっ、ママ凄い。というか、これまでどんな画像をパパに見せたの？」

「ふふっ、内緒よ」

上品なママムにしか見えないママは、画像ソフトを立ち上げると同時に、偽装サイト作成に取りかかった。このサイトを経由させることで、パパに疑いを持たせないらしい。

この間まで、韓流アイドルにハマっていたママは、ネットでアイドル画像を入手してツーショット写真に加工していた。そして、今では、独学で情報共有巨大掲示板サイトを構築したりするほどのテクを身につけているらしい。

ママが偽サイト作りに精を出している間、私は近所のコンビニまで散歩に出かけた。

賑やかなひふみ市中央の駅前や、国道沿いの大型商業施設近辺とは違い、近所の旧住宅街は人口が少ない。やけに寂しい雰囲気が漂っていた。

病み上がりの私は、表通りのコンビニに行くだけで息がちよつと荒くなる。

「確かこの辺の本棚に……見つけたわ」

やっと辿り着いたコンビニで、私はお目当ての不動産情報誌を手にした。

コンビニ内の休憩所でカフェオレを飲みながら本をめくる。しかし、今まで不動産情報誌を読んだことのない私には、不動産の専門用語は難しい。

「まとまったお金を作るために白鷺家の土地や建物売るしかないけど、ひふみ市の地価って随分と安いね。あら、この駅前デザイナーズマンション、とても可愛い」

土地の値段を調べていた私は、ついカラーページに掲載された分譲マンションに見入ってしまう。駅前のこんなマンションに住めたらなんて素敵だろう。白鷺家の屋敷はお爺様がお趣味で建てた

大きな洋館で、私たち家族三人で住むには広すぎる。しかも七室もある客間は閉め切ったままで、もったいない。

夢中になってデザインーズマンションのページをめくる。と、コンビニの駐車場に軽トラが停まり、作業着姿の男性が店内に入ってきた。

ホットコーヒーとサンドイッチを買った男性は休憩所を覗き、おもむろに私に声をかけてくる。

「もしかして、白鷺家のお嬢さん？ 学校はどうしたんですか。それに、随分と真剣に何を読んでいるのかな？」

突然のことに驚いた私は、まじまじと男性を見つめた。彼には見覚えがある。そして、作業着の胸に刺繍された「土浦開発」という会社名を見て、男性の素性を思い出した。

「お久しぶりです、土浦君のお兄さん。私、風邪で二日間寝込んでいて、やっと今日起きられるようになったので、コンビニで買い物をしていました」

同級生・土浦樹君のお兄さんは、青白い顔の私を見かけて、心配でつい声をかけたと言った。私は、小学生の頃に土浦樹君と遊んでいた時期があり、彼のお兄さんとも面識があるの。

「白鷺家のお嬢さんが不動産情報誌なんか読んで、マンションでも買う予定があるのですか？ うちも土建屋だけど、不動産も少し扱っているから、分からないことがあれば相談に乗りますよ」

「まあ、土浦君のお兄さんが専門家なら、是非お聞きしたいことがあります。私、不動産の知識がなくて困っていたんです。山一つ、どのくらいのお値段で売れますか？」

私の質問に、土浦君のお兄さんは飲んでいたコーヒーを噴いて激しくむせる。

「プフワアッ、いきなり山を売つばらう相談ですか。さすが白鷺家のお嬢さんはスケールが違う。しかし、この辺の山を欲しがる人を探すのは難しいな」

私が読んでいた不動産情報誌を渡そうとしたら、土浦君のお兄さんは鞆の中からタブレット端末を取り出し、不動産サイトにアクセスした。そして、ひふみ市の不動産情報を表示させる。

「ひふみ市の地価は毎年下がっています。現在、宅地は数百万円だけど、山や原野は軽自動車程度の値段しかありませんよ」

「えっ、山の価格ってそんなに安いんですか？」

駅から離れた地域の土地を欲しがる人は少なく、買い手がいても値下げを要求されてしまうそうだ。土浦君のお兄さんから、「土地を手放すより、資材置き場として有効活用したほうがいい」と言われた。

その話の途中、私は肝心なことを思い出す。

「そういえば、白鷺家の不動産がどこにあるのか、私は正確な場所を知らないんです」

「俺はこれから仕事で法務局に行くんですが、そこで白鷺家の土地も調べられますよ。どうしますか、お嬢さん」

「お願いします、土浦さん。白鷺家の土地を調べて下さい。我が家は今、取り込んでいて、動けるのが病み上がりの私しかいないんです」

私は親切な土浦君のお兄さんから名刺を受け取ると、少しお話をしてからコンビニを出る。

帰り道は、来た時よりもさらに足が重たく感じられた。

ヒロイン転入二日目。

「ヒロインちゃんはサッカー部のマネージャーになってくれる約束だったよね？」

『ごめんなさい月影君。ヒロインは特待生に選ばれた語学力を活かして、ワールドワイドな校内放送にチャレンジしたいの』

朝早く登校したヒロインは、縋る月影君を袖にして、教室から放送室へ移動する。

昨日は悪役令嬢・白鷺百合子が学園を休んだせいで、日比野君と金田君の出会いイベントが発生しなかった。でも今日こそはそんなヘマはしない。難関攻略キャラの一人、放送部部長の土浦樹君とお知り合いになるのよ♪

知的で真面目な土浦樹君は、許嫁がいるのに自分に言い寄る白鷺百合子に不信感を持っている。

物語序盤、ヒロインが放送部に入部届を持って行くと、そこで土浦君と白鷺百合子が言い争う場面に出くわすというシナリオなの♪

ヒロインが放送室前に着いたところ、シナリオ通りに土浦君と白鷺百合子の姿が確認できた。

「白鷺さん、僕に協力できることが……」

「土浦君、今の私たちはただの知人で……」

二人は何か言い争っているみたいだけど、距離があるから全部は聞き取れない。そんな二人の前

に、ヒロインが颯爽と登場するの♪

『おはようございます、放送部部長の土浦さんですね。私、昨日この学園に転入してきたヒロインです。放送部に入部希望を——』

そして土浦君は、突然現れたヒロインの澄んだ美声に心を奪われるはずだったんだけど……

「君、見て分らないのか！ 今、僕は彼女と大切な話をしているんだ」

土浦君がとても不機嫌な表情でヒロインを見る。えっ、これってどうなっているの！

コンビニで土浦君のお兄さんと話した翌日。私・白鷺百合子が学園に登校すると、隣のクラスの土浦樹君が教室の前で待っていた。

彼は昨日コンビニで話をした土浦さんの弟で、日比野君のお友達。

土浦君は【土浦開発株式会社】と会社名が印刷された大きな茶封筒を私に手渡し、早口で話しかけてきた。

「白鷺さん、兄貴から預かった不動産関係の書類だよ。こんなところで不動産売買の話をするのもどうかと思うから、悪いけど一緒に放送室まで来てくれないか」

「土浦君、ありがとうございます。土浦君のお兄さんには昨日相談したばかりなのに、もう資料が仕上がったなんて、本当に助かります」

彼の言う通り、教室の前で不動産売買の話なんてできない。クラスメイトには風邪で休んだ間に溜まった学年委員の仕事だと告げて、私は土浦君と放送室に向かった。

派手で明るい金田君に、知的な土浦君、氷の王子と呼ばれる日比野君と私は、小学部まで家族ぐるみのおつき合いをしていた。

でも、最近では学園で顔を合わせても、挨拶するだけの仲。もし私が男の子だったら、何の気兼ねもなく、友人関係を続けられていたかもしれないけれど……

そんな取り留めもないことを考えていた私は、人気のない放送室前の廊下に着いてすぐ、土浦君の説明に耳を傾けた。

「これが昨日、法務局から取り寄せた書類で、地図に色を付けた部分が白鷺家所有の不動産だ。赤は宅地、緑は家を建てられない場所だよ。白鷺さんが兄貴に相談した山は、入山するのに他人の私道を通るしかないから、売るのは難しいと言っていた」

「そうなのね……ママやじいやも、白鷺家の土地については曖昧な場所しか知りませんでした。とても正確な資料を作って下さった土浦君のお兄さんに感謝します」

私はそう言って資料を受け取る。すると、何故か土浦君は私の顔を観察するようにジッと見つめた。「あのう、土浦君。どうしたんですか？」

「僕は白鷺さんの家が大変なことは知っているけど、関心はなかった。兄貴にそう言ったら『友達が青白い顔をして悩んでいるのに、お前たちは気にしないのか』って怒鳴られたよ」

土浦君のお兄さんは、私たちが子供の頃、一緒に遊び回る姿を見ていたから、今でも仲が良いと

思っているのだろう。

「白鷺さん、俺に協力できることがあったら……」

「土浦君、今の私たちはただの知人で、友人としてのおつき合いはありません。お兄さんには不動産の件で、またご相談に伺いますとお伝え下さい。土浦君の迷惑にならないように、私から直接お兄さんへ連絡します」

私は彼の言葉を遮り、ママが作ってくれた私の名刺を差し出して、これをお兄さんに渡して欲しいと伝えた。

土浦君の気持ちはいれいいけど、一億の借金を前にして未成年の学生にできることなんて殆どない。それに、彼に迷惑をかけてしまうのは申し訳なかった。

その時、誰かが甘えるような高い声で土浦君に声をかける。

『おはようございます、放送部部长の土浦さんですね。私、昨日この学園に転入してきたヒロインです。放送部に入部希望を——』

「君、見て分からないのか！ 今、僕は彼女と大切な話をしているんだ」

土浦君の不機嫌そうな声に、女の子は驚いてその場から逃げだした。

土浦君と話した後、私は再び具合が悪くなり、午前中で学園を早退することになった。私は保健委員のクラスメイトに付き添われて、迎えに来た老執事、じいやの車に乗り込む。

中途半端に田舎で、駅から遠い立地のひふみ学園には、車通学するお金持ちの生徒が多い。登下

校時は、道路の左右に送迎車がずらりと並ぶほど。天候の悪い日には、学園の周囲が大渋滞になる。今日もまだお昼前なのに、下校時刻が早い小学部の生徒の送迎車が、校門近くで陣取り合戦を始めていた。

「百合子お嬢様、まだ本調子ではありませんね。家に着くまで横になられて下さい」
車内でじいやに注意されたけれど、私は気になることがあるので、土浦君から受け取った茶封筒から地図を取り出した。

それを確認したところ、土地成金と呼ばれたお爺様が遺した土地が、学園の私道沿いに一か所あった。この土地は緑色に塗られていて、家を建てられない区域だけど、もしかしたら……

「じいや、家に戻るのはやめて、急いでこの茶封筒に書かれた【土浦開発株式会社】に向かって下さい」

プレハブ二階建ての事務所に、弁当を抱えた男たちがドヤドヤと入ってくる。

その奥のくたびれたソファーには、セーラー服姿の黒髪美少女が腰かけていた。彼女の後ろには、燕尾服姿の初老の執事が控えている。

土浦開発の社長は現場に出ているため留守。なので、突然の訪問客は息子の土浦兄が対応した。

「こんにちは、白鷺百合子さん。今朝弟に資料を渡したばかりなのに早速相談に来るとは、白鷺家は随分とお困りの様子ですね。土浦開発としてもできる限り協力をしたいのですが、昨日話した通

り、この地域の不動産価格は安いですよ」

「土浦さん、正確な資料を作成して下さりありがとうございます。おっしゃる通り、白鷺家はお金に困っています。それで土浦開発さんにご協力をお願いに参りました。こちらのお仕事は道路関係の土木工事メイン。土地の整地は得意ですね」

「しかし、白鷺家の山を整地しても住宅は建てられないし、買い手を探しても見つからないでしょう。後は畑にするか資材置き場にするしか使い道はありません」

土浦兄は、老執事を従えて現れた百合子が、土地を担保に金を無心に来たのかと警戒していた。ところが、彼女はテーブルの上に地図を広げると、山ではなく別の一点を示して口を開く。

「ひふみ学園裏門の道沿いに、白鷺家所有の原野があります。ここを契約駐車場として貸し出したのです。最近、ひふみ学園周辺は、送迎車の違法駐車が問題になっています。ですから道沿いの土地を整地して駐車場にすれば、利用者が必ず出てきます」

彼女の言葉に、土浦兄は身を乗り出して地図を覗む。そして、隣にいた事務員にノートPCを持って来させ、ひふみ学園周辺の画像マップを表示させる。

「なるほど、白鷺家の土地は道路沿いに細長く、駐車場にちょうど良い形をしている。この広さなら車七十台は余裕で停められますね」

「学園裏門は部活動帰りの生徒が大勢利用します。土浦開発さんに白鷺家の雑草が生い茂る原野整地と、地面をコンクリートで舗装する駐車場整備をお願いしたいのです。整地費用を安くして頂ければ、白鷺家の駐車場管理も土浦開発さんにお任せします。委託費は駐車場賃料の二割でいかがでしょう」

通常、不動産管理を委託する場合の手数料は、駐車場賃料の五〜十%。それを百合子は二十%で頼むという。土浦兄は、手帳に数字を書き留めながら電卓を叩く。

「白鷺のお嬢さん、こちらが断る理由なんてありませんよ。我々は土地整地の専門ですから格安で請け負っても、駐車場管理委託費が二割なら充分利益が出ます。ちなみに、一時間いくらの有料駐車場か、月極契約駐車場のどちらにしますか」

「契約駐車場をお願いします。複数年の長期契約で、駐車場料金を一括支払いできる方から優先して契約します」

百合子が駐車場の複数年長期契約と言ったので、土浦兄は首を傾げる。すると、彼女の後ろに控えていた初老の執事がおもむろに口を開いた。

「最近ひふみ学園周辺は、違法駐車を取り締まりが厳しいのです。駐車違反金の支払いや、校門前の場所取り合戦のわずらわしさを考えれば、駐車場を契約したい者は大勢いると思います」

百合子との話を済ませた土浦兄の仕事は速く、彼は昼食中の作業員に声をかけると、さっそく軽トラで土地を見に出かける。

駐車場整地と管理委託契約は、老執事から連絡を受けた、百合子の母親が行うことに決定した。

それから一週間後。天気恵まれたおかげで契約駐車場が完成。希望者が殺到し、瞬またたく間に契約者の枠が埋まった。

中には小中高合わせて十二年分の駐車場料金を一括払いする契約者もいたのだった。

駐車場の完成から数日後。久しぶりに家業の土浦開発事務所に顔を出した土浦樹は、兄や従業員が百合子の話をしているのを聞いた。

「白鷺家のお嬢さんは凄いなあ。売りに出しても二〇〇万円しないあの土地を、たった一週間で一〇〇〇万円の価値がある駐車場にしちまった」

「駐車場の整地作業中、お嬢さんは俺たちを気遣って毎日茶請けや飲み物を持ってきてくれたよ」

土浦樹は従業員たちの会話に入れず、しかも兄が自分を面白そうに眺めているのを見て、そそくさと事務所を後にした。

悪役令嬢改め、守銭奴令嬢 白鷺百合子

借金返済状況

パパの破産を食い止めて、二〇、〇〇〇、〇〇〇円確保。

駐車場賃料（七十台 複数年契約）一〇、〇〇〇、〇〇〇円を手に入れた。

手持ち資金 三〇、〇〇〇、〇〇〇円

借金残高 一〇〇、〇〇〇、〇〇〇円

第二章 令嬢、お化け屋敷の買い手をさがす

白鷺家が土浦開発に駐車場整地を依頼して二週間。

駐車場利用が始まり、学園裏門側の駐車場には沢山の車が停まっている。それを見た私・白鷺百合子は、土浦君のお兄さんの前で感動して泣いてしまった。

そして土曜日の夕暮れ。私は自宅の応接室のテーブルに地図を広げて、悩んでいる。

「百合子お嬢様、少し休憩いたしましょう。ばあやが焼いたクッキーはいかがですか」

老執事のじいやが、トレイにコーヒーとお菓子を載せて運んできた。キッチンではママと家政婦のばあやが夕食の準備中、庭師の健太さんは、伸びた松の枝を綺麗に剪定している。

私はトラジャ豆の香ばしい薫りに目を閉じ、コーヒーに口を付けた。そして、手にした資料を見ながら大きな溜息をつく。

「じいや、聞いてくれる？ 借金返済のために土地建物を売ろうと考えていたのに、一番価値のある私たちの住む白鷺家本邸は、パパのものではなく長男伯父様の所有物件だったの。パパ名義の不動産は、じいやたちが住んでいる離れの従業員宿舍と、買い手のつかない山と田んぼだけ。もし土地建物が全部売れても、借金は少ししか減らないのよ」

以前、パパはこの山をゴルフ場に開発する計画を親友に持ちかけられた。そこで数億の資金を友人に託し、それを騙し取られて会社は倒産。煽りて、ママが経営していた輸入家具のお店も連鎖倒産してしまった。

共同経営者だった親友の裏切りに遭い、すっかり人間不信になったパパ。だから今は家に引きこもり、株投資にのめりこんでいるのだ。

「駐車場の件は上手くいったけど、このままじゃ期日までに借金を全部返せない。じいやたちも雇えなくなるわ」

「百合子お嬢様、白鷺家が苦しいことはじいやが一番存じ上げております。実は、じいやとばあやは白鷺家に雇われているのではなく、奥様のご実家から派遣されているのです。庭師の健太も、白鷺家ご長男様に本邸の管理を任されています」

じいやに聞かされるまで、私はその事実を知らなかった。気の毒だけど、パパは誰からも信用されず、ママの実家から派遣されたじいやとばあや、そして伯父様が雇っている健太さんが白鷺家を切り盛りしていたのね。

「百合子お嬢様が我々のことを心配する必要はありません。いざとなればじいやはタクシー運転手、ばあやは食堂でアルバイトをして、自分の食い扶持ぐらい稼げます」

じいやはそう言っても、これ以上ママの実家や伯父様に迷惑はかけられない。

「じいやもばあやも健太さんも、私の大切な家族よ。そうだわ、どうせパパが引きこもって白鷺家を訪ねるお客様なんていないし、じいやたちも本邸に引っ越して来ればいいのよ。そして離れの従

業員宿舎を、アパートとして貸し出しましょう」

「百合子お嬢様、それはよいアイデアです。しかし、あの古い洋館を賃貸アパートとしてリフォームするには、それなりの費用がかかりますよ」

離れの従業員宿舎は古い洋館風の建物で、1LDKのお部屋が四つある。じいやは私の提案に喜んだものの、少しためらうような表情をした。どうかしたのかしら。

それから数十分後。食事の準備が整ったので、私とママは食堂で夕食をとる。

テーブルに並べられた今日のメニューは、もやしと山菜のお浸しに豆腐ハンバーグ、糸こんにゃくとゴボウのきんぴら。体に良いヘルシーな食事だけど、コストをぎりぎりまで抑えた結果の献立だ。ちなみに、汁物がお吸い物風なのは具材が不足しているから。

キッチン片隅には、ネギや貝割れ大根が植えられている。これは、主婦向け雑誌で紹介されていた節約方法の一つ。そんな些細なものにまで頼るくらい、白鷺家の家計は火の車だった。

「ママ、白鷺家は食費を削るほど家計が苦しいのね」
私は、デザートあんじょうの杏仁豆腐あんじょうを美味しそうに食べるママに声をかけた。

その杏仁豆腐は、百円均一で売られているデザートもとの素で作ったもの。私の言葉に、家政婦のばあやは悲しそうな表情をしたけど、ママはしっかりと私の顔を見て、ニッコリ笑う。

「そうね百合ちゃん。でも、お金がなくても、食べ物については心配する必要がないの。農家に貸した田んぼから、賃料として収穫したお米を貰えるし、ママの兄弟が余った贈答品を沢山くれるわ。」

百合ちゃんが果物を食べたいなら、次姉様から北海道メロンや宮崎マンゴーを貰って来てもいいわよ」

ママの言葉に、ばあやも説明を付け足す。

「奥様のご兄弟から色々と贈答品を貰ってきて下さるおかげで、台所の納戸なだには食べきれないほどの干し椎茸しいたけや、海苔のりや切り干し大根、漬け物や素麺そうめんがあります」

「ふふっ、ママも百合ちゃんも運に恵まれているのよ」
ママは財閥一族ざいばつの、八人兄弟の甘え上手な末っ子。裕福な兄弟は、ママに贈答品を分けて助けてくれる。

私たちはまだ大丈夫、きつとパパの借金を返して、穏やかな生活を取り戻せるわ。

そういえば雑誌の節約特集に、家の不要物を捨てて運気を上げるという風水の記事があったことを思い出す。

「そうよママ、お家のいらぬ物を捨てて運気を上げましょう。どん底の白鷺家に幸運を呼び込むの」

「百合子お嬢様、ばあやも大賛成です。私たちが従業員宿舎から本邸に引っ越す前に、客間をすべて掃除しましょう。この機会に奥様のお洋服や、色々なものが詰まった開かずの間も大掃除するのです」

「えっ、ママのコレクションルームはそのままでもいいのに」

ママが慌てて言うけど、ばあやは聞こえないフリで掃除の準備を始める。

開かずの間というのは、ママの服や装飾品、アイドルグッズを溜め込んでいる客間の一室のこと。ばあやは以前から開かずの間を掃除したがっていたので、これはいい機会だと思ったの。

私たちはさっそく、掃除のために客間に向かう。でも、開かずの間は……開いてはいけない魔窟まくつでした。

ブランドバッグや靴、ドレス、そして韓流グッズで埋め尽くされたママのコレクションルーム。韓流スターの等身大マネキンが床に転がっているのを見た時、私は思わず倒れそうになった。

そんな私の横では、どんどんものを捨てようとするばあやを、ママが必死に止めている。

「ばあや待ってえ、それはゴミじゃないの。ヨヨン様直筆のサインが書かれた、大切なお菓子の包み紙よ！」

「奥様は子供の頃から物を溜め込んでいて、いつもお片づけができませんでした。でも今日こそはこの汚部屋おへやを、なんとしても人の住める状態にしなければ」

「ママのクローゼットの中、脱ぎ捨てっぱなしにしていたお洋服の山が、ゴソゴソ動いている。中から何か黒光りした不気味な……キ、キャア……ッ！」

私は悲鳴を上げて、ママのコレクションルームから逃げ出した。

閉め切った魔窟まくつは、黒くて素早い家庭内害虫——Gの住み家になっていたの。お掃除前に害虫駆除をしなくてはならない。

その後は、ゴーグルと防塵ぼうじんマスク姿の健太さんがママの魔窟に乗り込み、殺虫剤を焚たいてGの駆

除作業をした。

結局、ママの汚部屋掃除は次の日の夜までかかった。

山のようなゴミを外に出して、やっとスッキリ片付いた客室を眺めていた私に、じいやが声をかける。

「お疲れ様です、百合子お嬢様。お嬢様の大好きなハーブティーが入りました」

じいやたちはとても有能だから、本当ならこんな状態になった白鷺家を簡単に見捨てて出ていくことができる。でも、じいやたちは私たち家族を見捨てないでくれている。

「私の部屋に近い客室を、じいやに使ってもらいたいの。今パパが頼りにならないでしょ。だからじいやが近くに来てくれたら、とても安心なの」

「じいやも百合子お嬢様の近くにいられば安心です。百合子お嬢様が体調を崩されても、すぐ駆けつけられますから。老いぼれのじいやですが、これからも百合子お嬢様を全力で支えましょう」

じいやの言葉に感謝しつつ、私は改めて借金返済の決意を固めた。

大掃除の翌日。私は校舎玄関で偶然会った土浦君に状況を聞かれたので、離れの従業員宿舎をアパートにするつもりだと話した。すると、彼に意外なことを言われる。

「白鷺家の離れの従業員宿舎って……あのお化け屋敷を、アパートにするの？」

「えっ、お化け屋敷？ まさか、そんな風に呼ばれているの」

私が聞き返すと、土浦君はぼつの悪そうな顔をして口ごもる。
言われてみれば、私にはなんとなく心当たりがあった。

離れの従業員宿舎は古い洋館風の建物で、1LDKのお部屋が四つある。パパは学生の頃、その一室を勉強部屋にしていたらしい。私も子供の頃は離れの洋館でよく遊んでいた。
昭和中期頃に建てられたお洒落な洋館は、長い月日と共に風雨にさらされ、確かにお化け屋敷みたいに見える。

それに夏休みになると、近所の小学生たちが懐中電灯片手に、離れの従業員宿舎の敷地に入り込む。そんな彼らに「日が沈んで暗くなったから家に帰りなさい」と注意したじいやを見て、大騒ぎしていた子供たちは泣きながら逃げ去るのだ。

私が従業員宿舎をアパートにすると話した時、じいやが浮かない顔をしていたのは、お化け屋敷の噂を知っていたからなのね。

「それから白鷺さん家の老執事は、子供たちに吸血鬼って呼ばれているよ」

「じいやが吸血鬼って、まさかウソでしょ！」

「ところが本当なんだ。でもお化け屋敷のことがなくても、駅から遠く、不便な場所にあるアパートは、入居者がしがが大変だよ。あの地域は人口が減少しているから、大通りの新築アパートでも空室がある。それにお化け……古いアパートは、リフォームしても安い家賃でしか貸せない」

「離れの洋館は、今まですっかりメンテナンスしてきました。それでも借り手はいないの？」

私は洋館の現状を詳しく説明したけど、土浦君は首を横に振る。

「あれって、かなり古い木造建築だよ。一般的に木造建物の法定耐用年数は二十二年、それ以上だと資産価値は殆どない。白鷺さん、急いでお金を作りたいならお化け屋敷を取り壊して、宅地として売り出した方が買い手は見つかるよ」

土浦君の言葉に、私は混乱してしまう。借金返済のために離れの洋館をアパートにしようと思っただけど、洋館を取り壊すなんて考えてもいなかった。

土浦君の言う通り、今の白鷺家の状況を考えれば、宅地として売却して借金返済に当てられるべき。でも、土地と建物が人手に渡っても、せめて思い出の詰まった洋館をそのまま残すことはできないのかしら。

ヒロインがひふみ学園に転入して、三週間が過ぎたわ♪

いつもより早起きしたヒロインは、ベッドの中でこれまでの出来事について一人反省会していたの。『転入翌日、ヒロインは難関攻略キャラの放送部部长、土浦樹君を狙って放送部に入部する予定だったわ。なのに土浦君はヒロインが邪魔者みたいな顔をしたのよ、まったく失礼しちゃう。やっぱり妥協して攻略キャラを選んではダメね♪』

土浦君なんて、難関攻略男子四天王の中でも最弱。

狙うなら、一番攻略が難しい氷の王子、日比野颯人君にする。

でも、ヒロインはせっかく日比野君と同じクラスになれたのに、それ以上の接点がない。日比野君はいつも取り巻きの男女に囲まれているし、ヒロインの側には月影&火谷がよろよろしている。そのせいで話しかけることもできない。

だから、物語を熟知するヒロインは、この三週間で三人目の通常攻略キャラである、風紀委員の水原拓海君と密かに接触して、彼の好感度を上げたの。

『ふふっ、風紀委員って本当に便利。水原君を介した学園の情報網で、日比野君攻略に必要な情報を入力したわ。地元サッカークラブ所属の日比野君は、週二回学園サッカー部の朝練に参加するの。このチャンスを逃す手はない!』

日比野君の情報を得た昨日の放課後から、ヒロインはサッカー部女子マネになったの。

今、ヒロインは、朝練中の月影&火谷コンビにスポーツドリンクを手渡ししている。

「ヒロインちゃんが放送部を諦めて、サッカー部マネージャーになってくれて嬉しいよ。なあ、火谷」

「日比野ファンクラブは名目上サッカー部女子マネだけど、連中は日比野に夢中で、俺たちには目もくれない。でもヒロインちゃんは、マネージャーとして月影と俺を支えてくれるもんな」

『ヒロインは全力で月影君と火谷君を応援するから、二人ともレギュラー入り目指して頑張って! ヒロインがしっかりバックアップしてあげるよ』

ヒロインに励まされて、月影&火谷コンビはオーバーアクションで喜んだ。

サッカー部の日比野ファンクラブ女子たちは、朝練を無視して氷の王子様・日比野君が現れるのを校門前で待っている。でも、ヒロインは物語を知っているから、そんなところで待っていたって仕方ないって分かっているの。

『それじゃあヒロインは、後ろでボール拾いをしているね』

ヒロインは月影&火谷コンビに声をかけて、朝練の邪魔にならないようにグラウンドの隅すみに移動した。

しばらくすると、校門側から女の子たちの黄色い声が聞こえてきた。そのすぐ後、まるで短距離走のようなスピードでジョギングしながら、日比野君が現れる。

背が高く日本人離れたシャープな体格、少し癖のある黒髪に、彫りが深く整った顔立ちの日比野君。彼はドリンクやタオルを持って追いかけてくる女子を次々と振り切り、練習に参加するためグラウンドに入ってくる。

ボール拾いをしていたヒロインは、爽やかな笑顔で日比野君に挨拶をするの。

『おはよう日比野君。新しくサッカー部のマネージャーになったヒロインです。早く練習に加わらないと、ボールを蹴る時間がなくなっちゃうぞ!』

その時、急に月影君の慌てた声が聞こえたわ。

「あっ、ヒロインちゃん危ない!」

ここで物語イベント発生。月影君が蹴り損ねたボールが、ヒロインに向かって猛スピードで飛ん



でくる。

イベントだこの後、日比野君はヒロインを腕の中に庇い、飛んできたボールを蹴り返す。日比野君にしっかりと抱き締められていたヒロイン、それから二人はしばらく見つめ合う♪ というシナリオなの。

イベント通り、日比野君はヒロインに駆け寄って腕を伸ばしてきた。その直後――

――パシイイーツ！

ボールがゴールネットを揺らし、グラウンドにいるサッカー部員からどよめきが起こる。

だけど、ボールを蹴り返したのは日比野君じゃない。

ヒロインの前には、艶やかな黒髪にすらりと長い手足の美少女が立っていた。

「おはようございます日比野君、それに女子マネさん」

日比野君に代わってボールを蹴り返した美少女――悪役令嬢・白鷺百合子がそう言うと、日比野君はヒロインそっちのけで白鷺百合子に声をかけた。

「女なのに、相変わらずとんでもないキック力だな。……おいキーパー火谷、全然ボールに反応できてないぞ。そんなんじゃない試合も控えだ」

な、なんで日比野君の出番を、白鷺百合子が奪っているの！

普段より早く登校した私・白鷺百合子は、校舎に向かう途中で足を止め、懐かしい気持ちでサッカー部の朝練を眺める。

子供の頃の私は男子より体格が良いおてんばで、日比野君たちとよくサッカーをしていた。私と日比野君は父親が同級生で、生まれた病院が同じ。そんな関係があり、父親同士が酒の席で私たちの婚約を決めたのだ。

小学部で金田君や土浦君と知り合ってから、自転車に乗って四人で冒険に出かけたり、私の家の庭で虫捕りをしたりして遊んだ。

でも中等部に上がる頃、私は体を壊して、殆ど寝たきり生活を送ることになった。

同じ頃、小柄でお人形みたいに可愛かった日比野君は、若竹のように背が伸びて、男らしく目鼻立ちの整った絶世の美少年に成長する。

すると小学部の頃に彼をからかった女子たちが目の色を変えてチャホヤしだした。それがトラウマとなり、日比野君は女の子が苦手になったらしい。

私は中等部後半から普通に通学できるようになったけど、勉強やスポーツ、遊びに忙しい男の子たちとの間には距離ができた。

許嫁の話も、パパが人間不信になって以来、日比野家との付き合いが途絶えさせいで自然消滅状態。

私は子供の頃からずっと日比野君だけを見てきたけど、今は恋を捨ててパパの借金返済に集中すると決めたのだ。

グラウンドの前で物思いにふけていた私は、サッカーボールがドドメ色ジャージの女子マネに向かって、勢いよく飛んでいくのを見た。

私の視界には日比野君がいて、彼は女子マネを庇おうとしている。

私は二人の前に飛び出し、胸でボールをトラップして受け止めた。そして、足下に落ちたボールを思いつきりゴール方向に蹴り返す。

——パシィイーン！

ボールは綺麗な放物線を描き、ゴールネットを揺らした。

「おはようございます日比野君、それに女子マネさん」

後ろを振り向いた私に、日比野君が声をかけた。

「女なのに、相変わらずとんでもないキック力だな」

久しぶりにその声を聞いた途端、全身の血液がドクドクと激しく沸騰して、耳と頬が熱くなる。緊張してしまい、日比野君の顔がマトモに見られない。

私は日比野君と、どこかで会った気がする女子マネに会釈をして、急いでその場を離れた。

朝練が終わり教室に戻ったヒロインは、モヤモヤした気分のまま席に着いた。月影&火谷コン

ビは、妙な話で盛りあがっている。

「白鷺さんのロングシュート、凄かったな。でも、蹴った時にスカートの中が見えたぞ」

「ああ、俺もすっかりと確認した。あれは水色の縞パンに間違いない！」

シナリオでは、日比野君に庇われたヒロインがクラスの女子に妬まれるという、恋愛ゲームならお約束の場面が展開するはずだった。

それが悪役令嬢・白鷺百合子のパンチラ話で大盛りあがりってどういうこと！

「月影&火谷、朝からなにスケベ話しているの」

「ちよつとサッカー部、この二人を黙らせてよ」

月影&火谷コンビに、女子からサイテーコールが起こる。当の白鷺百合子は、隣のクラスに出かけているらしくいなかった。

「お前たち、下らない話はやめろ。これ以上騒いだらどうなるか、分かっているな」

そう言った日比野君が、丸めた教科書で月影&火谷コンビの頭を叩いて制裁を加える。

しばらくして教室に戻ってきた白鷺百合子は、ざわついた雰囲気不思議そうに首を傾げながら席に着いた。すると、別クラスの金田君が教室にやって来て、大声で白鷺百合子に声をかけたの。

「おはよう百合ちゃん、パンツ見られたからって気にするなよ。最近は見せパンとか見せブラとか色々あるからな」

「えつ、金田君。いきなり何の話？」

「おい金田、お前も黙れっ！」

日比野君が金田君の首根っこを掴んで廊下に引きずり出す。やっと事態を理解した白鷺百合子が恥ずかしそうに顔を覆う。そこに戻ってきた日比野君は、今度は白鷺百合子を教室の外に連れ出した。

ヒロインは、三人が出て行った教室の扉を思わず睨みつけたわ。

『ちよつとふざけないでよお。ヒロインを放置してアンタたちだけで、なに青春しているの！』

つい怒りの声をあげたヒロインに、月影君がきよんとしつつ質問してきた。

「ヒロインちゃん、般若のような顔で何を怒っているの？」

日比野君に教室から連れ出された私・白鷺百合子は、保健室のイスに座っていた。

「白鷺さんは熱が出たことにするから、ここでちゃんと話し合いなさい」

ひふみ学園の保健医、木村先生は私たちにそう声をかけると、机について背を向けたまま知らないふりで仕事を始めた。

ベッドに腰かけた金田君は、ゴメンゴメンと頭をかきながら私に謝る。

そんな金田君を軽く睨み、日比野君が口を開く。

「白鷺のスカートは短くないから、足を上げて蹴ったとしても中は見えないはず……たぶん」

「学園一のお嬢様、百合ちゃんだからこんな大騒ぎになるんだ。見せパンだし平気、とでも言っておけばいいよ。だから気にすんな。それよりあの距離からロングシュートを決めるなんて、さすが百合ちゃんだ。小学生の頃は、日比野より百合ちゃんの方がサッカーうまかったもんな」

「えっ、金田君は私と遊んだことを覚えているの？」

金田君はニヤリと笑うと、イスを引いて私の横に座り、肩が触れるぐらい近くで私の顔を覗き込む。

「そういえば金田君は、子供の頃からとても人懐こかった。」

「百合ちゃんは最近、土浦と仲良しだね。あのクソ真面目と何しているの？」

金田君が言った次の瞬間、保健室の扉が開いて、話に出てきた土浦君が現れる。

「いきなり日比野に大切な話があると言われて来たけど……あれ、白鷺さんがいる」

「なあ、クソ真面目な土浦君。お前、百合ちゃんとどういう関係？」

何故か、金田君はトゲのある言葉で土浦君に話しかける。土浦君には、離れの洋館の件で話をしただけなのに。

「金田、なにか勘違いしているな。白鷺さんは僕じゃなく土浦開発に用があるんだ。学園裏門の駐車場は、僕の兄貴が管理しているから」

「金田君も私の家の事情を知っているでしょ。白鷺家はお金に困って、資産売却の方法を土浦開発さんに相談しているだけなのよ」

私と土浦君がほぼ同時に抗議すると、拍子抜けした様子の金田君は、イスの背もたれに体を預

けた。

「なんだ、そうなのか。俺はつきり百合ちゃんが土浦と……」

そんな中、日比野君は一人離れて、窓の外の景色を見ている。

学校で話すにはふさわしくないお金絡みの内容だけど、ここまで話してしまったのなら、金田君と日比野君にも白鷺家の状況を説明してしまおう。

「実は今、白鷺家の離れの洋館をアパートにするか、解体して土地を売却するか検討しているの」

「百合ちゃん、あの洋館を解体するなんて冗談だろ。白鷺家の洋館っていったら、アメリカン・ビクトリアン様式の旧内田邸を模した建物で、あれだけ立派なヤツは地域の宝なんだぜ。しかも、あそこは俺たちにも思い出深い場所だ」

私の話を聞いた金田君は、突然顔を真っ赤にして怒り出す。そういえば金田君の家は、金田建設という建設会社だから、建物について詳しいのね。

「だが白鷺家は、土地を切り売りして借金を返さなくちゃならない」

詳しく事情を知る土浦君が金田君に言い返し、二人は睨み合いになる。そんな中、私は金田君の言葉に微かな喜びを感じていた。

「金田君は、みんなで離れにお泊りした時のことを覚えているのね」

「ちゃんと覚えているよ、百合ちゃん。小学部の頃、屋根裏部屋でお化けを探したり、ゲームで夜更かしをしたりして、白鷺家のばあやに怒られたよな。……そういえば、建築デザイナーをしている俺の姉さんも、あの洋館には以前から興味があるみたいだ。姉さんなら、洋館を解体しなくて済

む良い方法を知っているかもしれない」

そう言った金田君は、スマホを取り出し出してお姉さんと連絡を取り始める。スマホで話しながら私の肩に手を回すのは、女の子の扱いに慣れている金田君の無意識の行動かもしれない。けど、少し恥ずかしい。

「えっ、さすが姉さん、情報通だな。分かった、すぐに連れて行く。…百合ちゃん、今、姉さんは離れの洋館にいる。車を呼ぶ時間はないから、俺のバイクで行こう」

金田君は通話を終えてすぐ、私の腕をとって保健室を出た。

「ちょっと待って金田君。そんなに走らないで」

私はまるで連れ去られるように、金田君のバイクの後ろに乗せられて離れの洋館に向かった。

白鷺百合子が連れ去られた直後の保健室で、日比野颯人は無表情で土浦樹を見た。

「土浦は、あの二人を追いかけなくていいのか？」

「うん、僕は行かない。白鷺さんは洋館を潰すのに気が進まない様子だったから、僕から金田の姉さんに連絡したんだ。金田建設は住宅やマンション売買を扱っているし、お化け屋敷を購入したい物好きな顧客がいるかもしれないと思って」

そう返事をした土浦も、スマホを取り出して電話をかける。

「ああ兄貴、昨日話した白鷺家のお化け屋敷の件で、大至急現地に向かつてほしい。そこに金田建設さんが来ているから、仕事の営業ができるよ」

金田君のバイクの後ろに乗って離れの洋館に駆けつけると、すでに金田君のお姉さんがそこにいた。彼女は門の前で、老執事のじいやから色々説明を聞いている。

金田君のお姉さんはパンツスーツに身を包んだ背の高い美女で、できる大人の女性の風格が漂っていた。

「お久しぶりね、白鷺家のお嬢さん。私のこと覚えているかしら。実は私、以前からこの洋館がとても気に入っていたの。日本では築二十三年以上の木造建築物は資産価値がないって言われるけど、海外では古い建物の価値が認められているのよ。イギリスでは、お化け屋敷に人気があるくらいなもの、こんな立派な建物を取り壊すなんてもったいない」

とても気さくに話しかけてきた金田君のお姉さんは、離れの洋館をリフォームして金田建設の設計事務所として使いたいと言う。

もしかしたら、洋館を解体しなくても済むかもしれない。私が少し期待しながら金田君のお姉さんと話していると、洋館前に見覚えのある軽トラが停まった。

「おはようございます、金田建設のお嬢さん。ちょっと待ってくださいませんか。白鷺家の洋館売却の

件は、先に土浦開発が相談を受けています。弟から連絡がありまして、俺は用事をキャンセルして駆けつけたんですよ」

土浦君のお兄さんは軽トラから降りると、難しい顔をしつつ、こちらに向かって歩いてくる。そんな彼に、金田君のお姉さんは堂々と返事をした。

「おはようございます、土浦開発の息子さん。私も土浦樹君から白鷺家洋館が解体されるかもしれないと連絡を受けて、用事をキャンセルして駆けつけました。物件を見せて頂きましたが、外観は古いものの、五年前に耐震補強工事をしているので、まだ充分に人が住めます。解体するよりも活用するべきだわ」

私は二人の間に挟まれて狼狽える。どうやら金田君のお姉さんと土浦君のお兄さんは、顔見知りの様子。しかも、さつき金田君のお姉さんが土浦君の名前を出した。

「あらっ、金田君のお姉さんは、この洋館の話をも土浦君から聞いたんですか？」

「ええ、そうよ。お化け屋敷をアパートにしたいという話があると、弟の友達の土浦樹君から連絡が来たわ。私は以前から洋館が気になっていたし、是非リフォームして使いたいの」

「弟は自分の考えで金田さんに連絡したのでしょうか。しかし、俺の考えは違います。土浦開発がここを買い取った場合、洋館を解体して四区画の住宅建設用地にします」

つまり、金田君のお姉さんは洋館を借りてリフォームしたいと言い、土浦君のお兄さんは土地を買って整地し、宅地にすると言っている。

私が二人の話に目を白黒させていると、じいやが土浦君のお兄さんと金田君のお姉さんに話しかけ、詳しく交渉するため離れの洋館に入っていく。取り残された金田君は、近所のコンビニで缶ジュースとお菓子を買ってきて、私に缶ジュースをくれた。

「百合ちゃんちの洋館はボロくなったけど、庭も木も、子供の頃と変わらないな。姉さんはカントリー調のインテリアが大好きで、この洋館に憧れがあるんだ。それにしても土浦のヤツ、姉さんに俺の友達だと言ったのか」

さつき土浦君に突っかかった金田君は、どこかばつの悪そうな顔で呟く。

そういえば私も土浦君に、あなたとはただの知人だと言ったことがある。こうして思い返すと、私たちは成長するにつれバラバラになっているのを実感した。

しばらくすると、話し合いを終えた土浦君のお兄さんと金田君のお姉さんが洋館から出てきた。二人の後ろにいるじいやが、私に目配せをする。

土浦君のお兄さんは私の正面に立ち、熱い声で営業トークを始めた。

「白鷺家のお嬢さん、ぜひ土浦開発と売買契約を結びましょう。当社はそちらの事情に配慮して、この離れの土地を一四〇〇万円で買い取る予定です」

——ドンッ！

次の瞬間、いきなり横から金田君のお姉さんが、土浦君のお兄さんを突き飛ばす。彼女は私の肩を強い力で掴むと、綺麗な顔を鼻先まで急接近させて叫んだ。

「ちょっと待つて待つて。白鷺家のお嬢さん、私個人で今すぐこの洋館を六〇〇万円で購入します。ちょうど車を買おう予定で準備していたお金があるから、すぐ頭金二〇〇万円を持つてくるわ。残り は定期貯金を解約して、今週中に支払います」

金田君のお姉さんは、今ここで洋館を買取ると即決してしまった。土浦君のお兄さんは口をあ んぐりと開いたまま話を聞いていたけど、我に返って彼女に言い返す。

「今の話だと、金田さん個人が洋館を購入するのですね。しかし、土地の購入には時間がかかりそ うだ。白鷺家は早急に多額の現金が必要ではありませんか？」

「確かに私一人の判断で土地購入はできません。でも、会社の連中を説き伏せて、土浦開発さんと 同じ値で買わせて頂きます。白鷺家のお嬢さん、是非私に売って下さい」

二人に決断を迫られた私は、じいやに視線を向けて助けを求めた。けど、じいやは何も言わず静 かに私を見つめ返している。

ここは私が白鷺家の代表として、確実な一四〇〇万円か、土地購入の不確かな洋館購入の 六〇〇万円かを決断しなくてはならない。本当ならすべてを売却して借金返済にあてるべきなのに、 私は思い出の洋館を残したいという、自分のワガママを押し通してしまった。

「では金田君の姉さんに、離れの洋館を六〇〇万円でお譲りいたします」

「うっしやあ、勝ったあー！」

金田君のお姉さんは大喜びで、こぶしを突き上げて勝利のポーズを決める。その隣で土浦君のお 兄さんは軽く肩をすくめ、彼女を見て笑った。

この中で一番慌てているのは、お姉さんの決断に驚く金田君。

「ええっ、姉さんマジか。ドイツ車を購入予定の金で、お化け屋敷を買うのかよ！」

「愚弟よ、何言ってるの。車ならいつでも買えるけど、お宝優良物件は数年に一度しか出ないと 言われているの。私は駅前デザイナーズマンションより、こっちの方が百倍も気に入った。今日から このお化け屋敷に住みたいくらいよ」

取り壊すしかないと思っていた離れの洋館に買い手が付いた。こんな奇跡があるのね。

悪役令嬢改め、守銭奴令嬢 白鷺百合子

借金返済状況

離れの洋館（上物）売却益六、〇〇〇、〇〇〇円を手に入れた。

手持ち資金 三六、〇〇〇、〇〇〇円

借金残高 一〇〇、〇〇〇、〇〇〇円